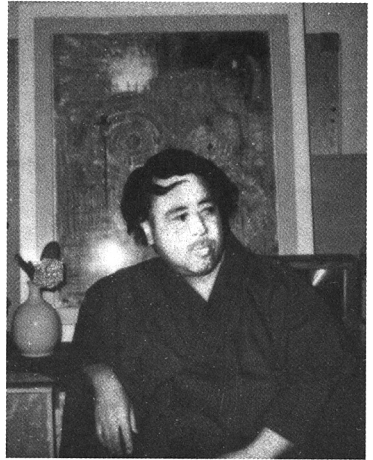
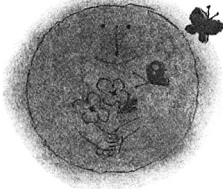


自伝的遍歴のあと

鈴木義治先生からの手紙



わたしは、一九一三年に、当時の横浜唯一の中心街に生まれ、そこで育ちました。賑やかな都会の少年だったわたしは、幼稚園の頃から、団体生活は大の苦手で、友だちから「おてこだ」「どんぐりまなこだ」とからかわれ、次第に、学校が嫌いになり、毎日のように、映画館に通い、外国映画に夢中でした。

おかげで、ひよっとすると、映画評論家の淀川さんと肩をならべられるぐらいの映画通だったかもしれません。映画とならんで音楽にも傾中しました。その後、絵画への学習意欲がつのり、一九三一年、川端画学校を卒業したあと、終戦の一九四五年まで、アメリカの映画会社、

「二十世紀フォックス」と「コロンビア」や、ヨーロッパ映画の配給会社（エムパイヤ商事）及び、東宝美術部に入社などの遍歴後、召集を受け、戦後、一九五〇年頃まで、コロンビアレコード、キングレコードのポスターや、ジャケツトなどのフリーとして働いていました。

本格的に絵画の世界に入ったのは、一九五四年の二科会で、特待受賞、三軌会でMO賞、会友推挙を受けたり、旺玄会や、二紀会や、大潮展などに応募を続けたのです。ただし、応募は自分の勉強のあり方を確かめるためであり、出版美術の領域へのステップであったのかもしれない。

一九五九年に、講談社の仕事を手はじめに、東都書房の「コタンの口笛」（石森延男著）のさし絵で、実際のデビューしました。

一九六五年頃から絵本の仕事を中心に、毎日出版文化賞、サンケイ児童出版文化賞、小学館絵画賞などを受賞することができました。すぐれた編集者たちとのであい、そして妻に感謝しています。こんどの生源寺さんとの仕事は懐かしい忘れかけていた抒情の世界の発見といった意味で、ほんとうにうれしかった。